

平成 28 年度ケナフ等植物資源利用研究会報告

高知大学 准教授 市浦 英明

平成 28 年 9 月 9 日に愛媛県紙産業技術センターで行われた平成 28 年度ケナフ等植物資源利用研究会について、紹介したい。今回は、特別講演 2 件、口頭発表 2 件および展示発表 10 件の発表があった。特別講演では、環境とサステイナブルに関するテーマで、神戸大学 川口先生より、バイオリファイナリーに関する講演、トータルケア・システム(株)長代表取締役からは、紙おむつリサイクルに関する講演があった。

川口先生は、主にホワイトバイオテクノロジーに関する内容であった。ホワイトバイオテクノロジーとは、バイオマス植物資源を利用して、バイオ燃料や化成品などの有用化合物を生産する技術である。微生物を活用して、エネルギーやマテリアルに変換するホワイトバイオテクノロジーは、経済産業省の技術ロードマップに掲載されているものである。



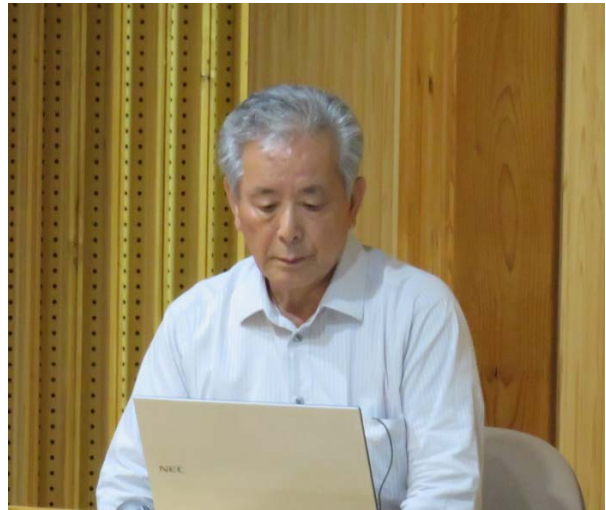
特別講演 I 講師 川口 秀夫 氏

これらは、二酸化炭素削減、脱石油さらには日本の林業・農業を強化する目的となっている。現在、バイオマスリファイナリーではセルロースナノファイバーの研究が活発化している。ケナフを利用したセルロースナノファイバーに関する報告もあった。バイオマスリファイナリーは、現在石油から製造されている化成品をバイオマスから製造できる技術なので、実用化が期待される。実用化のためには、農工連携や医工連携などの他分野との連携が重要になってくると考えられる。

長代表取締役からは、現在福岡県大牟田市で行っている紙おむつリサイクル事業に関する報告であった。今後、日本では大人用紙おむつの使用量が増大してくる。日本では、現在焼却処分が大部分を占めており、リサイクルは、全く考えられていないのが現状である。リサイクルをする際にネックになるのが、どのような方法で回収するかである。その際に、重要なことは、自治体との連携である。トータルケアシステム(株)において紙おむつリサイクル事業が成功している理由として、その自治体との連携がとれている点が挙げられる。現在、大型研究プロジェクトの研究の実装化にあたり、社会科学の研究者をメンバーに入れる傾向がある。研究の社会実装のためには、

自治体との連携が重要になってくること示唆するものである。現在、紙おむつは、アジア圏を中心にその利用が増大している。これらの地域は、廃棄物処理のインフラが整っていない。このことから、今後は紙おむつのリサイクルはこれらの海外で重要になると予想される。その際の実装化には、社会科学を含めた様々な分野との連携が必要になると考えられる。

2つの講演とも、環境およびサステイナブルの意識が高まる内容であった。ケナフ協議会でも環境やサステイナブルに貢献できる活動が重要になると予想される。



特別講演Ⅱ講師 長 武志 氏